

薬害 HIV 感染患者のメンタルヘルスの支援に関する研究

研究分担者

木村 聡太 国立国際医療研究センター エイズ治療・研究開発センター

共同研究者

大友 健 国立国際医療研究センター エイズ治療・研究開発センター

小松 賢亮 和光大学、国立国際医療研究センター エイズ治療・研究開発センター

加藤 温 国立国際医療研究センター 精神科

研究要旨

支援者が抱える支援の課題を解決していくこと（支援者支援）は、要支援者の適切な支援につながる。本研究では、国内外の支援者支援研究の現状を把握し、今後の実態調査への示唆を得ることを目的とし、文献調査を行った。支援者支援とは、災害や感染症の流行時など有事に行われることが多いものの、日常的な支援においても有用であることが示唆された。

また、長期療養におけるメンタルヘルス支援のために、看護職との協働に関するセミナーを開催した。

【研究 I】

A. 研究目的

血友病等疾患および HIV 感染症の治療の進歩により、非加熱血液凝固因子製剤による HIV 感染血友病等患者（以下、薬害 HIV 感染者）が身体的な健康を維持しながら長期療養が可能な時代となった。その一方で長期療養に伴う薬害 HIV 感染者のメンタルヘルスには未だ課題が残っている。

そうしたメンタルヘルスの支援を行う中で、例えば、精神疾患の症状としての妄想や心気症状による支援の困難感をはじめ、十分な支援を用意しても社会的な支援に乗らない者たちや適切な医療につながらないなど、支援者が困難感を抱えることも珍しくない。また、薬害 HIV 感染者の長期療養を身近で支える家族への支援においても同様のことが考えられる。

藤澤ら（2023）によると「支援者への支援は職務特性からも必要であり、支援者への適切な支援は支援の質を向上させることが従来から指摘され「支援

者支援」としての取り組みは、広い領域において様々な形で実践されている」と、支援者に対する支援が要支援者らの適切な支援となると述べている。また、藤岡（2018）は支援者支援学を構成するものとして「バーンアウト、二次的トラウマティックストレス、共感疲労、共感満足、感情労働、代理性トラウマ、ポストトラウマティックグロース（心的外傷後成長）、レジリエンス」を挙げ「支援者支援学は、支援者のメンタルヘルスを良好な状態に保持する側面を超えて、いかに支援者が、危機状況や困難場面で、適切に機能していくか、そのための留意点は何かということの探求へと踏み出している」と支援者自身のメンタルヘルスの良好さと支援者として適切に機能していくための留意点への理解の重要性を述べている。

そのため、本研究ではメンタルヘルスの支援を行う支援者への支援について文献調査を行い現状を把握することを目的とする。ひいては今後の研究として薬害 HIV 感染者およびその家族のメンタルヘルス

を支援する支援者が実際の支援において抱える課題を抽出することに資すると考えられる。

B. 研究方法

文献調査として、インターネット上の文献検索データベースを用いて2000年から2024年における本邦および海外の支援者支援についての先行研究を調査した。

本邦の調査においては医中誌 Web を使用し、海外の調査においてはPubMedを使用した。なお、検索の結果はいずれも2025年1月17日現在の結果である。

検索語は、日本語では「支援者支援」とし、英語の場合は日本語の「支援者支援」に合致する言葉が存在しないため、近い意味を持つ用語として「support for mental health provider」とした。

C. 研究結果

「支援者支援」と検索すると医中誌 Web において138件の論文（解説・総説含む）が抽出され、2005年に初めて支援者支援の論文が医中誌 Web に登録されてから2013年より増加傾向にあり2017年の23件を最多として近年も増加していた（図1）。

「support for mental health provider」と検索するとPubMedにおいて9件が抽出され、2024年の4件が最多であった。なお、PubMedで初めてsupport for mental health provider が登録されたのは、2015年であった（図2）。

和文、英文ともに、抜粋した文献については表1に示す。これらのタイトルや内容から地震などの自然災害時やCOVID-19の世界的な流行など有事での支援者支援に関する文献が多くみられた。例えば、藤澤ら（2020）は、心理職による災害支援者への支援の実践状況の現状を把握することを目的に文献調

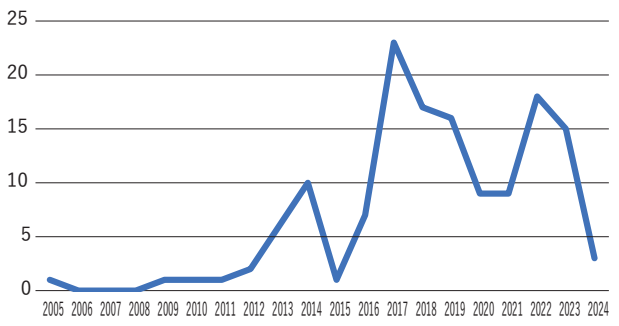


図1 医中誌 Web の検索結果

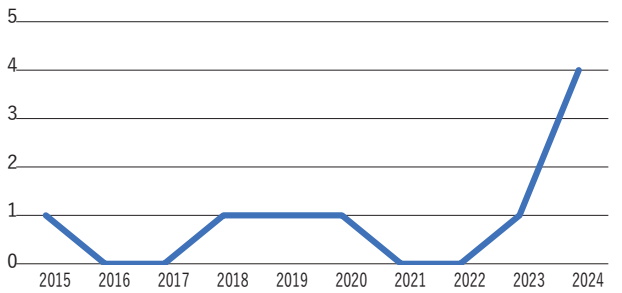


図2 PubMed の検索結果

表1 文献抜粋

タイトル	著者	発行年	雑誌名
災害看護学の研究領域ごとの文献検討 2011 年を境とした比較	中島麻紀ら	2021	日本災害看護学会誌,23(2),3-16.
支援者の傷つき体験が支援に与える影響について 心的外傷後成長と支援者支援の視点から	京野あすか	2020	社会事業研究,59,139-145.
心理職による災害支援者支援に関する文献検討	藤澤美穂ら	2020	岩手医科大学教養教育研究年報, 55,79-90.
効果的なDPAT活動に向けての論点 Delphi調査における自由記述の分析	福井貴子ら	2016	心的トラウマ研究,12,1-22.
性暴力被害者の精神鑑定 鑑定の役割を中心に	橋爪きょう子ら	2005	臨床精神医学,34(6),813-821.
Mental health experiences of HIV/TB healthcare workers during the COVID-19 pandemic -lessons for provider well-being and support from a qualitative study in seven South African provinces.	Blia Yang et al.	2023	BMC Health Serv Res,23(1),727.
Mental Health Disorders in Nurses During the COVID-19 Pandemic: Implications and Coping Strategies.	Brittney Riedel et al.	2021	Front Public Health:9:707358.

査を行い、対象となった災害（東日本大震災、熊本・大分地震など）を明らかにし、さらに支援者に向けた研修や心理教育を実践していたことを報告している。また、Blia Yang ら（2023）は、コロナ禍での HIV/結核の医療現場にて、医療従事者が急激に変動する感情を経験し、それにより医療従事者の幸福感に悪影響を与えていたことを明らかにし、コロナ禍での仕事の負担感を軽減することや（医療従事者への）支援の充実が必要であることを述べている。Brittney Riedel ら（2021）の調査も同様に、コロナ禍での看護は仕事量の増加や患者の転帰の悪化、社会システムへのアクセスの減少という形でストレスフル（重大なトラウマとなりかねないもの）であり、看護者への支援の重要性を述べている。

このように有事での支援者支援に関する文献が多い一方で、有事に限らず平時での支援者に関しては、藤澤ら（2023）によると、事例検討や会議および研修会の開催、心理教育といったことが挙げられていた。

D. 考察

支援者支援の研究においては本邦では特に自然災害時の支援者支援についてのマニュアルが作成されており、有事のものとして位置づけられていることが示唆された。本邦における研究の動向をみても、2013 年以降に支援者支援の文献が増加しているのは東日本大震災の影響が考えられる。また、海外の動向においても COVID-19 流行時の支援者支援が検討されていた。

一方で、本研究で目指す支援者支援は日常的な（いわゆる平時の）臨床での困りごとであり、文献調査を行うことで有事に限らず平時における支援者支援も検討されておることが明らかとなった。

なお、文献検索に関して、支援者支援についての英語表記については今後も引き続き検討していく必要があると考えられた。

E. 結論

文献調査をもとに、支援者支援の実態調査につながる示唆を得ることができたと考えられる。

今後は薬害 HIV 感染者およびその家族のメンタルヘルスを支援している心理職を対象にした支援者支援に関する実態調査を実施予定であり、現在当院の倫理審査委員会に計画書等を提出し審議中である。

【研究Ⅱ】

A. 研究目的

HIV 感染症はその治療の進歩により長期療養が可能な時代となり、高齢化や合併症のコントロールといった新たな課題も増えている。合併症には様々あるが、メンタルヘルスの支援も含まれている。HIV 感染症患者をとりまくメンタルヘルスの課題は、精神疾患をはじめ服薬・闘病疲れやセクシュアリティによる生きづらさ、HIV に対する差別・偏見など多岐にわたり、その支援が適切な HIV 治療に関わっていくため、多職種による協働や支援の実際を学び、深めることが必要とされている。

そのため、メンタルヘルスの不調を抱えた HIV 陽性者への支援を振り返り、看護職と心理職のそれぞれの役割に基づいた協働と支援を学ぶ機会として、「HIV 感染症の医療体制整備に関する研究」（分担研究：ブロック内中核拠点病院間における相互交流による HIV 診療環境の相互評価と MSW と協働による要介護・要支援者に対する療養支援のネットワーク構築）が主催する“令和 6 年度 全国の HIV 診療に携わる看護職と心理職の相互交流セミナー メンタルヘルスに課題のある HIV 陽性者に対する看護職と心理職が協働する支援とは Vol.2”を「HIV 感染症の医療体制整備に関する研究」の共催として開催した。

なお、今回は特に中高年期の HIV 陽性者のメンタルヘルスへの理解を深めることを目的とした。

B. 研究方法

全国の HIV 診療に携わる看護職と心理職を対象に、2025 年 1 月 31 日にオンラインにてセミナーを開催し、事後にセミナーに関するアンケートを行った。

C. 研究結果

参加者は 132 名であった。セミナー実施後のアンケートは、91 件の回答があり、その結果について報告する。

職種については約 70%が看護職であった（図 3）。勤務地としては、32%が関東甲信越ブロックで（図 4）、勤務先の機関としては 82%がエイズ治療拠点病院であった（図 5）。46%の回答者が HIV 陽性者への支援について 5 年以上の経験を有しており（図

6)、およその担当症例数でみると“10例未満”が32%で最多であった（図7）。

セミナーの内容については、教育講演と事例はともに90%以上が「良かった」と回答し、セミナーの開催形式については80%以上が、開催日時や時間、オンライン形式であったことに「良かった」と回答した（図8）。

自由記述にてセミナーの感想等も収取しており、その結果は表2に示した。

D. 考察

参加者の8割はエイズ治療拠点病院に所属し、日ごろからHIV陽性者の支援に携わっていた。看護職と心理職ともに参加がみられ、経験年数および担当症例数においても様々な年数・症例数からの参加がみられた。

セミナー全体の評価についても9割ほどが良いと回答しており、参加者にとって有益な会であったことが示唆された。

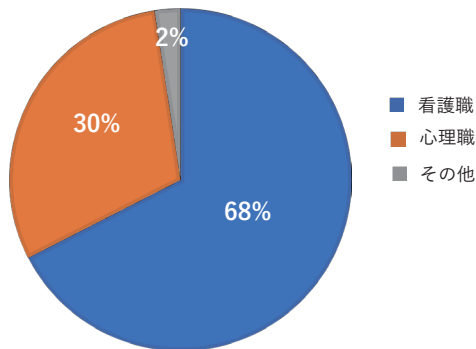


図3 職種

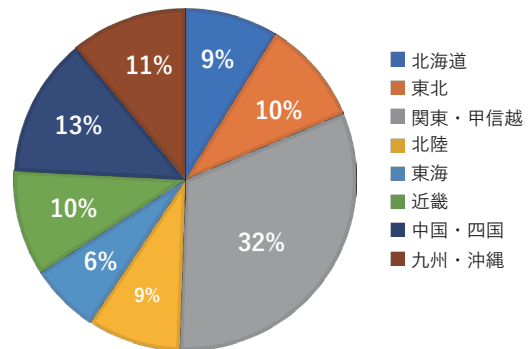


図4 勤務地（ブロック）

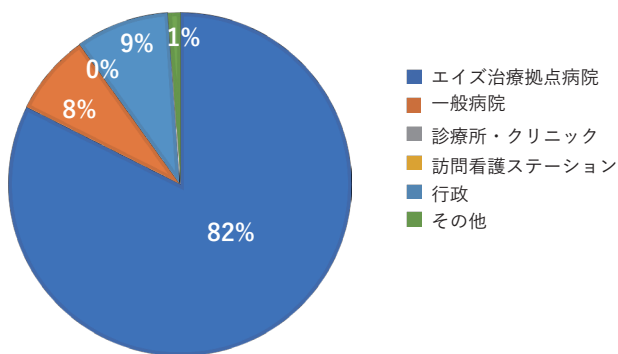


図5 勤務先の機関

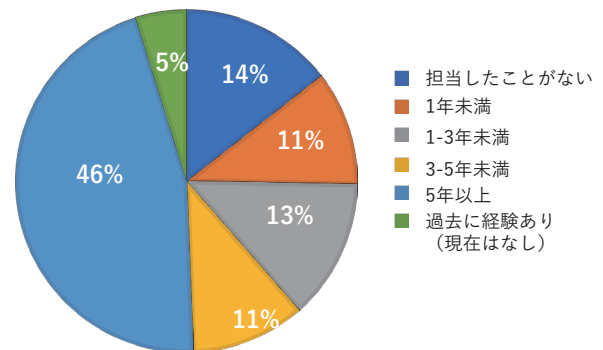


図6 HIV陽性者への支援の担当期間

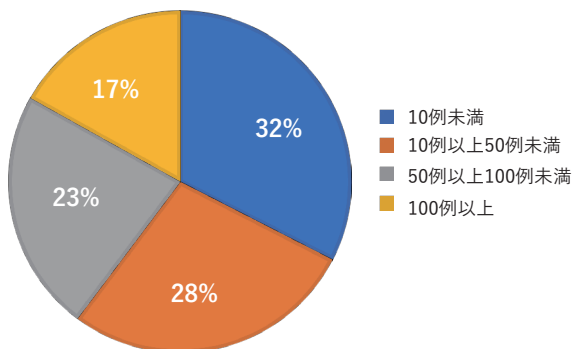


図7 HIV陽性者の担当症例数

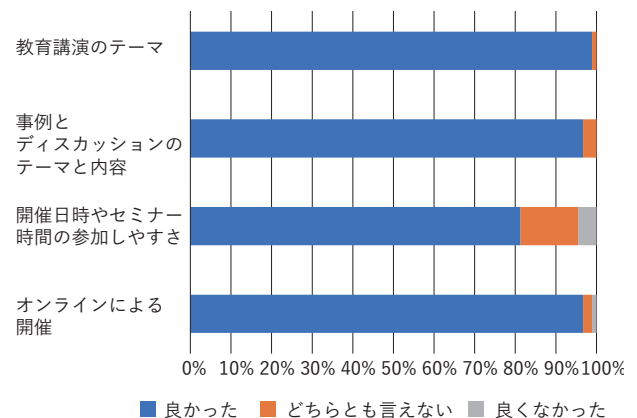


図8 セミナーの感想

表 2 セミナーの感想（自由記述）

中年期から高年期にかけてのHIV陽性者のメンタルヘルスの支援について、どのような支援のイメージをもつことができましたか？-抜粋
患者の喪失感、孤独を理解する
メンタル、フィジカル両側面からの支援が必要
喪失の連続というキーワードを忘れずに、看護師として喪失感に寄り添いながらも、いきいきと過ごせるように支援していきたいと思いました。
自分がイメージするよりも高齢になることは喪失体験になるのだと思いました。まずは、できることとして患者さんの声に耳を傾け、患者さんの今に寄り添うことが大事だと思います。
教育講演にあった「生み出す力、世話する力に着目し、そこに意義を見出すこと」という一文を見て、自分自身も大事に考えていることだったので安心しました。
看護職と心理職の協働についてどのようなイメージをもつことができましたか？-抜粋
看護職は患者の最もそばにいて、患者の声を拾いやすく、意識して拾い上げて声を心理職につなげることでこそ孤独や孤立を防げると思った。
患者理解をより深めるために、互いにコミュニケーションをしながらそれぞれのアセスメントを統合し、連携して患者サポートをすること
それぞれの役割、できることを分担しながら、また共有しながら患者様のために動くことが大事だと考えました。
看護師は、身体にかかわる面をメインにみて、傾聴を通してこころの支援を行う。心理職はより、心理面のプロフェッショナルであるため、心理面をメインにかかわる。また、適宜、診察の様子から見て感じた患者の様子を共有し、カウンセリング、他科看護師と連携するというイメージを持てた。
セミナーへの感想やご意見、今後企画してほしい内容がございましたらご記入ください。-抜粋
今後も同じように事例があるとわかりやすいと感じます
事前のアンケートを共有していただいたことで各参加者がどのようなことを考えているのかがよくわかって良かったです。
具体的な事例をあげ、わかりやすいセミナーであった。
喪失体験の話をする患者さんと関わることがあるので、事例の紹介は大変参考になりました。企画いただきありがとうございます。
ドロップアウトする患者への関わりについて教えてほしいです。
看護職さんが、これは心理職につなげよう！と思うタイミング、内容など今後知れると良いと思いました。

E. 結論

引き続き、HIV 陽性者へのメンタルヘルスの支援および、多職種協働に関するセミナーや研修を開催していくことが必要と考えられる。

【研究Ⅰ・Ⅱ共通】

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

1. 木村聡太, 大友健: HIV 領域で働く心理職を対象にした e-learning の受講者の背景と e-learning の評価. 第 43 回日本心理臨床学会. 2024 年 8 月 横浜.
2. 大友健, 木村聡太, 霧生瑤子: ADHD に関するアセスメントのために CAT 標準注意検査を実施することの有用性. 第 43 回日本心理臨床学会. 2024 年 8 月 横浜.
3. 木村聡太, 大友健, 小松賢亮, 佐藤愛美, 野崎宏枝, 大杉福子, 栗田あさみ, 谷口紅, 鈴木ひとみ, 杉野祐子, 大金美和, 池田和子, 加藤温, 照屋勝治, 湯永博之: HIV 陽性者における自殺に関連する患者背景情報の検討 - 症例対照研究 -. 第 38 回日本エイズ学会. 2024 年 11 月 東京.
4. 鈴木ひとみ, 谷口紅, 杉野祐子, 栗田あさみ, 高橋昌也, 大杉福子, 佐藤愛美, 池田和子, 大金美和, 木村聡太, 大友健, 宮本里香, 照屋勝治, 湯永博之: ACC 通院中の HIV 感染症高齢患者の実態調査. 第 38 回日本エイズ学会. 2024 年 11 月 東京.
5. 杉本悠貴恵, 坂本涼子, 木村聡太, 杉野祐子, 大金美和, 東政美, 藤井輝久, 藤谷順子, 湯永博之: メンタルヘルスに課題のある HIV 陽性者に対する看護職と心理職の協働支援とは～全国 HIV 陽性者に携わる看護職と心理職の相互交流セミナーのアンケート調査より～. 第 38 回日本エイズ学会. 2024 年 11 月 東京.
6. 木村聡太, 大友健, 小松賢亮, 福嶋千穂, 高橋昌也, 宮本里香, 小形幹子, 佐藤愛美, 野崎宏枝, 大杉福子, 鈴木ひとみ, 大金美和, 中本貴人, 上村悠, 加藤温, 藤谷順子, 照屋勝治, 湯永博之: 薬害 HIV 感染者の生きがいに関する研究. 第 38 回日本エイズ学会. 2024 年 11 月 東京.
7. 佐藤愛美, 大金美和, 上村悠, 鈴木ひとみ, 大杉福子, 谷口紅, 杉野祐子, 木村聡太, 池田和子, 中本貴人, 照屋勝治, 湯永博之: HIV 感染血友病等患者の定期通院時の移動手段の実態調査と今後の課題についての検討. 第 38 回日本エイズ学会. 2024 年 11 月 東京.
8. 宮本里香, 上村悠, 大金美和, 池田和子, 野崎宏枝, 佐藤愛美, 鈴木ひとみ, 杉野祐子, 谷口紅, 栗田あさみ, 大杉福子, 高橋昌也, 木村聡太, 中本貴人, 近藤順子, 高鍋雄亮, 丸岡豊, 照屋勝治, 湯永博之: HIV 感染血友病患者の歯科紹介における医療連携の検討. 第 38 回日本エイズ学会. 2024 年 11 月 東京.

9. 大友健, 木村聡太, 湯永博之, 照屋勝治, 加藤温, 小松賢亮, 池田和子, 大金美和, 杉野祐子, 鈴木ひとみ, 谷口紅, 大杉福子, 野崎宏枝, 佐藤愛美: 抑うつ尺度を用いた HIV 患者におけるカウンセリング適用者スクリーニングの試み. 第38回日本エイズ学会. 2024年11月 東京.

Strategies. Front Public Health:9:707358.

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1. 特許取得
2. 実用新案登録
3. その他

いずれもなし

引用文献

1. 藤澤美穂・小黑明日香・高橋文絵・高橋智幸 (2023). 本邦における“支援者支援”の実際に関する文献検討. 岩手医科大学教養教育研究年報, 58, 63-73.
2. 藤岡孝志 (2018). 支援者支援学とは. 高橋昌 (編). 災害支援者支援. 日本評論社, pp.25-38.
3. 中島麻紀・神原咲子・小澤若菜・宮前繁・山本あい子・南裕子 (2021). 災害看護学の研究領域ごとの文献検討 2011 年を境とした比較. 日本災害看護学会誌, 23(2), 3-16.
4. 京野あすか (2020). 支援者の傷つき体験が支援に与える影響について 心的外傷後成長と支援者支援の視点から. 社会事業研究, 59, 139-145.
5. 藤澤美穂・小黑明日香・高橋文絵・氏家真梨子・畠山秀樹・高橋智幸 (2020). 心理職による災害支援者支援に関する文献検討. 岩手医科大学教養教育研究年報, 55, 79-90.
6. 福井貴子・加藤寛 (2016). 効果的な DPAT 活動に向けての論点 Delphi 調査における自由記述の分析. 心的トラウマ研究, 12, 1-22.
7. 橋爪きょう子・小西聖子・広幡小百合・浅川千秋・中谷陽二 (2005). 性暴力被害者の精神鑑定 鑑定の役割を中心に. 臨床精神医学, 34(6), 813-821.
8. Bliya Yang, Rafaela Egg, Heena Brahmabhatt, Mahlodi Matjeng, Thanduxolo Doro, Zandile Mthembu, Batanayi Muzah, Brendon Foster, Johanna Theunissen, Ashley Frost, April Peetz, Katie Reichert, Graeme Hoddinott (2023). Mental health experiences of HIV/TB healthcare workers during the COVID-19 pandemic - lessons for provider well-being and support from a qualitative study in seven South African provinces. BMC Health Serv Res, 23(1), 727.
9. Brittney Riedel, Sydney R Horen, Allie Reynolds, Alireza Hamidian Jahromi (2021). Mental Health Disorders in Nurses During the COVID-19 Pandemic: Implications and Coping